

経済マンスリー [原油]

高値が続く原油の需給バランス

原油価格（WTI 期近物）は 6 月中旬以降、イラク情勢が急速に緊迫の度を増したことを受けて上昇し、1 バレル=106 ドル近辺で推移した（第 1 図）。しかし、7 月 2 日、リビアで反政府勢力が制圧していた主要石油ターミナルが同国政府に引き渡される決定を受けて供給再開見通しが高まったことから、原油価格は軟化し、7 月 15 日には 99 ドルと 2 ヶ月振りに 100 ドルを割った。その後、ウクライナ情勢を巡る地政学リスクの強まりを受けて原油価格は 104 ドル台に上昇したが、足元では 100 ドル近辺で推移している。

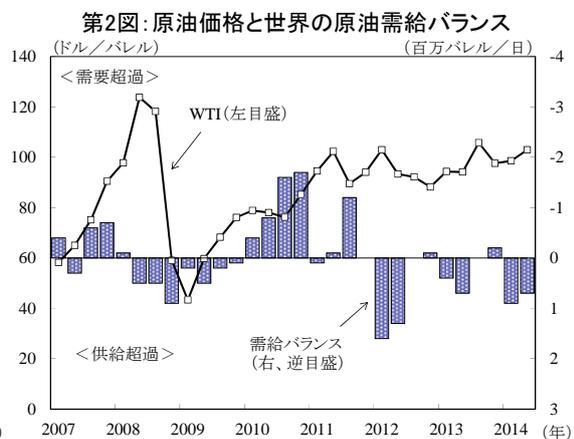
4 月以降、原油価格は 100 ドルを上回る高値圏で推移している。ウクライナやイラク、リビアの情勢緊迫による地政学リスクの高まりを受けて、原油先物市場における投機筋の買い越し額は過去最高水準に積み上がっている。こうした投機資金の流入が原油価格を押し上げた模様だ。

世界の原油需給バランスをみると、4～6 月期の原油需要はアジアを中心に増加したが、米国のシェールオイル増産を受けて供給全体も増加した。石油輸出国機構（OPEC）の生産量は日量 3,000 万バレルと、1～3 月期に続き生産目標と同じ水準だった。OPEC は、高値圏にある原油価格と米シェールオイル増産動向を考慮し、目立った生産調整を行なわなかったとみられる。こうした結果、4～6 月期の世界の需給バランスは供給超過となっており、超過幅は前期から縮小しているが、価格への影響は小さかったと見込まれる（第 2 図）。

リビアについては供給懸念がひとまず後退したが、イラクとウクライナ情勢への警戒感は根強く、原油価格は当面強含みで推移すると見込まれる。世界景気は回復傾向にあるがそのペースは緩やかであり、原油高の景気・物価への影響を注視する必要がある。



(資料) Bloombergより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成



(資料) IEA資料より三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱東京 UFJ 銀行 経済調査室 宮城 充良 mitsuyoshi_miyagi@mufg.jp
篠原 令子 reiko_shinohara@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊社ホームページでもご覧いただけます。